

カント第三アンチノミーの前史

河村克俊

はじめに

『純粹理性批判』の第三アンチノミーにおいて、自由の問題は、事象の総体としての世界の問題と不可分に結びついている。そこでは、すべての出来事が「自然の法則に従う原因性」(B 472 / A 444)¹⁾にのみ基づき、その出来事の系列、連鎖が原因の原因へ向けて無限に遡源されるのか、それともこの連鎖の遡源が端的な第一原因とともに完結するのかという問いが、人間の自由または人間の意志の自由の問題に先立ち、そのコンテクストとして前提されている。換言すれば、世界が特権的な第一原因を許容し得るのかどうか、先ず第一に問われているのである。

翻って18世紀当時のドイツの形而上学書を視野に置かならば、そこではほとんど例外なくヴォルフの著書『ドイツ語の形而上学』²⁾での分類に従い、自由の問題は「経験的心理学」の章で、行為または意志の選択、決定の問題として主題化されていたことが明らかになる。全体の構成に関しては『純粹理性批判』もまた、このヴォルフの手になる形而上学の分類にほぼ従っている。このヴォルフの分類では、事象の総体である世界を主題化するのは宇宙論であり、『純粹理性批判』³⁾では、アンチノミー論がこれに対応している。また、同書のための草稿が執筆されていた時期にあたる1770年代後半の講義録『ペーリッツ形而上学』⁴⁾でも、慣例に従い、自由概念は先ず、「経験的心理学」の章で(そして「合理的心理学」で)取り上げられていた。批判哲学生成の途上にあつては、長らくヴォルフ流の形而上学の問題構成が、恐らくはバウムガルテンを介してカントの思索を制約していたことが、このことからうかがわれる。それにもかかわらず何故1781年のカントはこの自由への問いを、世界概念を主要問題とする宇宙論の章で主題化したのだろうか。また、このような問題設定は、カント固有のものだったのか、それともすでにあつたものをカントが受容したのか。この点が先ず問われねばならない。

結論から言えば、自由をすべての出来事の連鎖のうちに顧み、これをある特殊な原因性と見做すのは、カント固有の見方ではなく、すでにクルージュスやテーテンスなどが同様の問題設定をおこなっていた。充足理由律の無制限な妥当性を認めないクルージュスには、行為の端的な第一原因を意味する「第一の自由な活動 (actio prima libera)⁶⁾」、そしてテーテンスには、外的な力によらず自身だけの力による働きとしての「自己活動性 (Selbsttätigkeit)⁷⁾」という自由概念がみられる。彼らには一様に、充足理由律と自由が矛盾を起こすという問題意識がみられるが、このような問題意識の共通の起源のひとつは、ヴォルフとハレのピエティストの自由に関する論争のうち

に求めることが出来る。この点については、すでにマックス・ヴント⁸⁾、ブルーノ・ピアンコなどによる言及がみられる。ピアンコは、ピエティスト派の神学者ヨアヒム・ランゲによるヴォルフ形而上学への批判がクルージウスを介してカントの批判的思惟にまで影響を与えていると指摘する⁹⁾。クルージウスのカント自由論への影響については、すでに繰り返しカント研究者により論証がなされている¹⁰⁾。この点についてここで論駁するつもりはない。ヴォルフとピエティストの論争はしかし、ただクルージウス経由でだけカントに影響を与えているわけではなく、実際には様々な問題史の経路がこの論争とカントとを結びつけていたと思われる。このヴォルフとピエティストの論争は、とりわけバウムガルテンを介して、第三アンチノミーの問題構成に決定的な影響を与えていたのである。本稿ではこの点を跡付けてみたい。

1. ヴォルフのプロイセン追放

1723年11月8日付けのプロイセン政府の勅令により、48時間以内という厳しい期限のもとに、ハレ市ならびにプロイセンの全土からヴォルフは追放されている。その直接の原因となったのは、1721年7月21日に行なわれたハレ大学学長代理職任期切れにともなう「中国人の実践哲学についての講演 (Oratio de Sinarum philosophia practica)¹¹⁾」であった。この講演の内容が神学者達によって無神論的だと見做されたのである。その後、神学者達はこの講演原稿の公開を再三求めるが、ヴォルフはこれになかなか応じようとしなかった。しかし1725年に著者の許可なしにこの公演の筆記録が出版されるに及んで、その翌年、ヴォルフ自身による周到な註の付けられた版が出される。このような事情があり、1725年以前の論争では、それまでに公にされていたヴォルフの著書、特に、自己の世界観を存在論、経験的並びに合理的心理学、宇宙論そして自然神学という分類に従って著わした最初の大著である『ドイツ語の形而上学』(1720)が主に神学者達により、批判の対象とされている。この18世紀ドイツ思想史上に残る大きなスキャンダルについては、ヴォルフの伝記¹³⁾、ヴォルフ哲学の歴史についての研究書などで繰り返し言及されているが、当時のドイツ思想界に与えた衝撃は、容易に計り知り得ないほど決定的であったものと思われる。因みに、ツェードラーの百科事典の「ヴォルフ哲学」の項には、ヴォルフ哲学についての論争書として425の書名、論文名が挙げられている¹⁴⁾。また、1727年から1736年までの間プロイセンではヴォルフの著書はすべて禁書扱いされていたが、その間にヴォルフ哲学についての様々な概説書や教科書が出版されている¹⁵⁾。このことから、ちょうどこの時期にヴォルフ哲学がドイツで盛んに受容されていたことが憶測される。

ところで、神学者達を論敵のプロイセン追放へと駆り立てた主な理由のひとつは、自由概念の理解にかかわる論争であった¹⁷⁾。本稿では、事件直後の1724年に刊行された、ヴォルフの上掲書に対するランゲの批判的短評と、それへのヴォルフの応答からなる論争書をテキストに、争点を明らかにすることに努めたい。そこに両者の対立点が鮮明に描かれているからである。

2. ヴォルフとランゲの論争

ハレ大学神学部の教授で、ピエティスト派の理論的指導者といわれたヨアヒム・ランゲは、ヴォルフの世界観のうち一種の運命論をみていた。ランゲに従えば、ヴォルフは自然現象だけでなく、「自由な諸原因 (causae liberae)」をも「機械的な運命 (fatum mechanicum) のうちに引き込んでしまった」(Kontrov. 18)。同じくランゲによれば、ヴォルフは「原因と結果の連鎖を無限な前進 (progressus in infinitum)」と見做したが、同様の考え方で「よく知られているようにスピノザとその同類達が、自由と道徳を抹殺したのである。そして第一原因 (prima causa) である神の存在を不当にも身近に引き寄せ、この世界のすべての出来事を、終わりのない永遠の連鎖のうちに持ち込んだのである」(ibid.)。

確かにヴォルフの形而上学書には世界を「機械」そして「時計」の比喩で説明するくぐり繰り返される。可能的世界構成の原理を充足理由律に求め、この世界のすべての出来事がひとつの機械のなかの様々な部分のように、相互に結び付き、規定し合っているとヴォルフは考えていたようだ。同書の宇宙論には、「機械とは、その作用が合成という仕方に基づいているような複合体である。同じく世界も、その変化が合成という仕方に基づいているような、複合体である。……従って世界はひとつの機械である」(DM § 557) という比喩がみられる。これに対し、部分が相互に結び付かず、規定し合わないような連鎖の例として、夢の中の出来事があげられている (vgl. DM § 143)。夢の世界には、充足理由律が妥当しないと考える訳である¹⁹⁾。

可能的世界についてのこのような比喩が、「機械的運命 (fatum mechanicum)」(Kontrov. 18) という批判を引き起こしたのである。また、ランゲがヴォルフは「神の現存在を不当にも身近に引き寄せた」というとき、そのことで意味されるのは、ヴォルフが、端的な第一原因であり、世界とは異なる次元に現存在すべき神を出来事の系列のうちに、すなわちわれわれの世界にまで引き寄せた、ということだろう。当時「スピノザ」の名前は「無神論者 (Atheist)」の代名詞であり、「スピノザ主義」または「スピノザ主義者」という表現は、論敵を攻撃し罵倒する際に用いられる常套語だった。この語を用いてヴォルフを非難するランゲは恐らく、世界に外在する神の否定と世界の原因に向けての無限背進という二つのテーゼに加え、すべての出来事は神の本性である必然性に基づいており、神自身の選択、決定をも含めて「自由」なるもの、「偶然」なるものはどこにもありえない²⁰⁾というテーゼをスピノザ同様ヴォルフの思想のうちにも認めていたのである (スピノザ自身の「無限背進」、「偶然」、「神の自由」についての基本的な考え方は、【エチカ】第一部、定理 28, 29, 32にみられる)。

さて、それではヴォルフ自身は第一原因と世界との関係を、そして「自由」の問題を、どのように考えていたのだろうか。先に引用したランゲの批判に対して彼は以下のように答えている。「私は無限前進 (progressus in infinitum) を認めない。というのは (私はまだ神の存在とそして神が自由な決断によってこの [出来事の] 連鎖を決定したことを証明してはいないが)、偶然な存在者 (existetia contingetis) を説明するにあたって、終わりなく常に新たな根拠 (Grund) をもたねばならないのならば [……] 出来事の連鎖において、そのものの前にはいかなる充足根拠 (ratio sufficiens) も

ありえないところに到る。[……] すなわち最後には第一原因または神に到らねばならない。またそのことでわれわれは偶然的なものの充足根拠を得るのである」(Kontrov. 20 f.)。ここで先ずヴォルフは、出来事の連鎖の無限性をはっきりと否定している。諸々の事象の連鎖は無限に続くのではなく、第一原因または神をもって終結する、と。次に、神の本性についてのヴォルフの考え、すなわち、神の選択がすべて必然的であって神自身にも自由がないと考えるのか、それとも神による選択が、神の自由な決定に基づくと見做すのかが問われねばならない。

ヴォルフを批判する際にランゲが引き合いに出したスピノザは、神の本性を必然性 (*necessitas divinae naturae* [神の本性の必然性^{21)nach seinem freien Rat)」(Kontrov. 21) に基づき、この世界が別様でもありえたという意味で、必然的ではなく、従ってこの世界の個々の出来事もまた必然的に起こるのではないとヴォルフは考える訳だ。この点に関連して、ヴォルフによる必然性概念の二分化に言及する必要がある。}

彼はライプニッツに倣い「必然的 (*notwendig*)」を(1)ある条件のもとで必然的 (*notwendig unter einer Bedingung*) と(2)「端的に必然的 (*schlechtedings notwendig*)」とに分けている (DM § 575)。個々の出来事は、ある条件のもとでは、すなわちこの世界では、その生起することが必然的であり、「この世界で」という条件を取り払えば、すなわち「この世界」が唯一可能な世界ではなく諸々の可能的世界の一つであると考えらば、この世界での出来事の生起の必然性は相対化され、もはや必然的とは見做し得ないとヴォルフは考えている。端的に必然的であるのは、あらゆる可能の世界で生起するはずの出来事である。端的に必然的なものの例として、ヴォルフは「幾何学」の諸々の定理等を考えているようである (vgl. DM § 576)。世界内の出来事は一般に、端的な必然性をもたない。それらは、この世界の事象の連鎖のうちにあるのは、換言すれば、それぞれが決定根拠、充足理由をもつ出来事の連鎖のうちにあるのは、他ではありえなかったという意味で、必然的である。この点を卑近な例で考えてみよう。

この世界で、私はいま京都にいる。そして分身をもたない私は、同時にトリアーにいることはできないし、また他のどの場所にいることもできない。この世界で私がいま京都にいることは、先行する私の諸々の行為、またこれを一部として含むあらゆる出来事の連鎖によって規定されている。私がいま京都にいることは、従ってこの世界の過去の出来事の総体によって規定されており、この規定が否定されない限り、すなわち過去にまで遡って諸々の出来事の連鎖が変更されない限り、変更不可能である。当然のことながら私は過去へ遡ることができず、その変更は不可能である。この現在の変更不可能性、それは充足理由をもって生起する事象の連鎖による規定性と不可分のものであるが、これが諸々の自然法則と並んで、出来事を必然的と見做す視点を構成する。

しかし、この世界そのものが他では決してあり得ないというような仕方では存在するものではなく、神の自由な選択——それが最善を選ぶという確率をもつにせよ——にその根拠をもつことから、世界自身がまた、神の選択という条件のもとでのみ必然性をもつことになる。「この世界」は存在しないこともあり得たのであり、別の世界すなわち、この世界の諸々の出来事とは異なる諸々の出来事の連鎖からなる世界が、現実の世界としてあり得たわけだ。あるものが、その無い

ことそして別様であることを許すなら、そのもののあることは偶然であると、ヴォルフは見做す。この世界と、そこに起こる諸々の出来事は、ある条件下での必然性をもつと同時に偶然的でもあると、ヴォルフは考える訳である。この点についてヴォルフは以下のように述べている。「世界はこの世界とは別様でもありえた」（DM § 577）。「世界〔自身〕は偶然であるから、個々の出来事もすべて偶然であるはずだ。というも、出来事はすべてこの世界があるがゆえにあるのだから。従って、個々の出来事すべてに妥当する自然の必然性は、出来事の偶然性を破棄するものではない」（ibid.）。この叙述を整合的に理解するためには、上記のような二つの必然性の区別を念頭に置くことが必要であり、そのことでヴォルフの世界についての基本的なテーゼが理解できる。すなわち、この世界——例外なく充足理由律に基づく現実の諸々の出来事の連鎖——に定位するとき、個々の出来事は別様ではありえず、必然的であると見做される。この世界が様々な可能的世界のひとつであり、別の世界——現実とは異なる諸々の出来事の連鎖——の可能であることが認められるとき、個々の出来事もまたその別様であること、または存在しないことが認められ、偶然性が付与される、という考え方が解る。

ランゲはヴォルフをスピノザ主義者と見做したが、以上のように両者の基本的なテーゼにははっきりとした差異が認められる。スピノザが事象の原因の連鎖を無限であると見做すの²³⁾に対し、ヴォルフはこれを端的な第一原因と共に終結すると考える。「神は意志の自由によって働くのではない」とスピノザが述べたのに対し、ヴォルフはこの世界が、神の自由な決断に基づくことを強調する。この世界を様々な可能的世界のひとつと見做すのか、それともこの世界以外のあらゆる世界の可能性をまったく認めないのかという点に、両者の違いがある。このように、ランゲの解釈するヴォルフと、この解釈に反論するヴォルフとの間に、差異があったわけだ。このランゲの理解するヴォルフの世界観のうちに、カントが後年第三アンチノミーの反定立として示す世界観のひとつの原型が、そしてこれに対するヴォルフ自身の反論のうちに同アンチノミー一定立のひとつの原型が読み取れるだろう。ヴォルフによれば、神は世界を、世界の最初の状態を、自らの決断で選んだ。換言すれば、神は、それ以後自然法則によって進行する世界の最初の状態を自ら始めたわけだ。従って神の自由には、「端的な第一原因」そして「ある状態を自ら始める能力」（vgl. KrV B 561 / A 533）の含意がある。ここで再び第三アンチノミー一定立の「証明」に視線を移すならば、そこに主題化されている自由が、ヴォルフ的な意味での神の自由概念であることがよく解る。また、ランゲの解釈するヴォルフと同じく、第一原因を認めず、原因への遡源を無限であると見做し、自由を認めないのは、同アンチノミー反定立のテーゼに他ならない。

ヴォルフの説がスピノザ説とは異なることを明確にするという課題はしかし、その後引き続きヴォルフ主義の思想家にとっての課題となったようである。例えばゴットシェートは、「スピノザならびにその他の運命論者の説は誤りである²⁴⁾」と述べ、現実にあるもの、現実²⁴⁾に生起したことだけが可能的であると主張するためには、生起しなかったことがすべて自己矛盾を含むことを証明する必要があると、スピノザ説を批判している。このような論点は、カントが最も慣れ親しんだ形而上学書であるバウムガルテンの『形而上学』のうちにも認められる。

3. 無限背進の不可能性についてのバウムガルテンのテーゼ

バウムガルテンの『形而上学』(1739)²⁵⁾、就中その宇宙論の章には「世界についての否定的概念 (notio mundi negativa)」と題された一節がある。そこでの論述は以下のように要約できる。

(1) 無限背進 (regressus in infinitum) とは、互いに外在するような偶然的なもの、そのうちのどれかが二次的な原因であって端的な第一原因ではないようなものの系列であるだろう。

(2) 無限背進は、その大きさが任意に仮定できるのだから、一個の全体としてみれば偶然的なものだろう。そしてこれが偶然的なものである限り、自身の外部に作用原因 (causa efficiens) をもつだろう。

(3) この無限背進の作用原因は、それ自身偶然的または必然的なものである。前者の場合には、再び自らの外部に作用原因をもつ。そしてそれ自身は二次的な原因であり、無限背進の一部である。

(4) 従って無限背進の作用原因は、必然的なそして何物にも依存しないような存在であるはずだ。

(5) この作用原因は自らに外在するような原因をもたない。よって諸々の結果の端的な第一原因である。

(6) 従って無限背進は、端的な第一原因を持たねばならず、また同時に、それが無限背進である限り、これを持つことが出来ない。故に無限背進は不可能である。この世界でも、そしてこの世界以外のいかなる世界でも、無限背進はありえない (vgl. M § 380 f.)。

ここには、世界の原因へ向けての「無限背進」のもつ自己矛盾が的確に示されている。すなわち背進するそれぞれの項が、そしてその全体が偶然的である限り、この背進は自身の外部に作用原因をもたねばならないが、そのことは同時に背進がこの作用原因とともに終結することを意味する。無限背進はしかし、背進の終了を許さないところにその本質をもつ。背進が無限であるためには、従って背進全体の偶然的であることが否定されなければならない。すなわち背進の全体が必然的であると見做されることが必要となる。背進全体が必然的であると考えるとき、その各項である諸々の出来事もまた必然的であることになる。このように考えるとき、世界は偶然や恣意を許さず、すべての出来事の決定されている運命論的世界となる。

ここでのバウムガルテンはしかし、この無限背進のもつ矛盾に端的な答えを与えている。すなわち、背進の外部に端的な第一原因を想定し、これを「世界に外在する存在 (ens extramundanum)」(M § 388) と名付ける。この名前の中にすでにスピノザへのアンチテーゼを読み取ることができるだろう。そして、運命論的世界観の誤りであることを以下のように強調している。「運命とは、世界における出来事の必然性である。世界の絶対的必然性由来する運命は、スピノザ主義であり、これは間違いであるだろう。この世界にも、またいかなる別の世界にも、このような運命はありえない²⁶⁾」。バウムガルテンがこのように考える背景には、個々の出来事の偶然性を認める視点があっただろう。同時にしかし、それぞれの出来事は必ず何らかの原因を持ち、この原因の連鎖が端的な第一原因を持つとする、ヴォルフ主義の考え方があっただろう。同書には「理由のないものはない (nihil est sine ratione)」(M § 22) というライプニッツ起源の命

題がみられる。恐らくバウムガルテンは、この世界が被造物であり、それが造物主を持つと考えていたのである。同書の「自然神学」の章には、「神は必然的かつ無限（*Deus est necessarium & infinitum*）」であり、「自ら以外の何ものかによって生み出されたもの（*[Deus] sit causatum extra ipsum positi alterius*）」ではなく（*non*）」、「自らが生み出した諸々の結果の端的な第一原因（*caussa effectuum suorum simpliciter talis*）」（*M § 851*）であり、「神は第一の作用原因である（*est ille [scil. Deus] causa efficiens simpliciter prima*）」（*M § 954*）とする記述がみられる。バウムガルテンは、世界に外在する造物主と被造物である世界、という二項関係を考えている。しかし「造物主」という特殊な第一原因をとらず、あくまでも結果である出来事からその原因の原因へとその系列を遡源することをだけ考えるとき、換言するならば、宇宙論の枠内でこの問題に取り組み、充足理由の原理に即してこのような原因の原因へ向けての背進を考えるならば、先にみたように、この無限背進は第一原因なしにはありえず、同時にしかし第一原因をもつことが許されないという矛盾に陥る。出来事の系列の遡源を無限と見做すか、それともこの遡源を第一原因と共に終結すると見做すかの違いは、結局は充足理由律に即して世界の生成の全体を洞察する際の、二つの仮説または解釈に他ならない。ライプニッツに倣って言えば、バウムガルテンが第一原因と考える神の自由な選択にもまた、何らかの充足理由があったはずである。すなわち、すべての事柄に充足理由または決定根拠があるならば、この神の選択の理由にもまた、それに先行する理由があったと考える必要がある。ここでのバウムガルテンはしかし、ライプニッツ、ヴォルフやゴットシェー²⁸⁾トと同様に、この背進を第一原因とともに終結すると見做し、この問題に終止符を打つわけである。

バウムガルテンの弟子、マイアーにも同様の視点が見られる。マイアーは『宇宙論』²⁹⁾（1756）で、無限背進の問題をとりあげ、次のように述べる。「充足理由律に従えば、すべての可能的な事象が充足理由（*einen hinreichenden Grund*）をもつことになるが、この充足理由もまた、自らの充足理由をもち、従ってどの充足理由も〔より先なる〕充足理由をもたないわけにはいかないような仕方であることになる」（*Cos § 314*）。マイアーはここで充足理由の原理に従って世界の全体を推論するところに無限背進が生成することを指摘している。そして、このような無限背進が「矛盾（*Widerspruch*）」（*Cos § 315*）をもつこと、またこの矛盾の起源が、世界の偶然性を認めつつ同時に第一原因を認めないことのうちにあることに言及し、これを次のように定式化する。「この世界は端的な第一原因であるような原因をもつ〔……〕無限に続くともなされた諸原因の前進はしかし、世界が第一原因をもつことを否認する」（*ibid.*）。個々の出来事の偶然性を認め、その在ることの原因をその出来事の外部に求めるならば、その原因のさらなる原因への系列は、どこまでも続くように見える。つまり、どの出来事もが十分な理由、または十分な原因をもつと考える限り、先行する理由、先行する原因への遡源は、世界内には自己原因や必然的存在者はみられないのだから、われわれの世界内では無限であるように思われる。この矛盾をマイアーもまた、特殊な第一原因によって解決する。すなわち、あらゆる可能的存在者は自らの在ることの理由を神のうちにもつ、そして神が端的な第一原因であると見做す（*vgl. Cos § 314*）。しかしこのような回答を与えたうえで、マイアーはこの問題が必ずしも十分に解決されてはいないことを告白している。「この論証に関しては、まだ様々なことが想起されるが、それら諸々の点については、世界の永遠性について論じるときまで残しておきたい」（*Cos § 316*）。この『宇宙論』で、彼が世

世界の永遠性について改めて論じることはなかったが、充足理由律のうちに無限背進の起源を洞察し、この無限背進のもつ「矛盾」を指摘するに止まらず、最終的な結論を保留するマイアーに、カントの先駆者を見ることは誤りではないだろう。

それでは、この充足理由律に即して世界の生成の全体を洞察する際に起こる矛盾に、カントはどのように答えるのだろうか。

4. カントのバウムガルテン受容

1759年以降毎年形而上学講義の教科書としてこのバウムガルテンの『形而上学』を用いていたカントは、上記のような宇宙論に精通していたはずである。レフレクシオン3928番には、次のような一対の断片が残されている。「生起するものはすべて決定根拠をもつ」(XVII 350)。「すべては第一根拠をもつ」(ibid.)。そしてこの両テーゼには、以下のようなコメントが付されている。「前者に従うとき、われわれは相互に規定する諸原因の系列のうちに、つねにより高次の諸根拠を見る。そして後者に従うとき、われわれはこの系列が限界付けられていると言わねばならない」(ibid.)。前者に従うとき、諸原因の系列は無限に継続されることになり、後者に従えば、系列は終結する。ここでの問いは明らかに、充足理由律に、またそれに基づく世界の生成の起源に向けられているが、カントがそのどちらのテーゼにも与していないことは、次のようなメモからも伺うことができる。「始まりのない、ただ従属的な諸根拠だけからなる系列を考えることは、この系列がどのようにして始まるのかを想像するのと同じ程に、難しい。生起するものはすべて決定根拠をもつ、という命題、この命題は無限な系列を必然化するが、これは現実の結合についてのわれわれのあらゆる理性判断の形式の原理である。これに対して、従属的なものの系列とすべての継起的系列は第一項をもつという命題は、総合的命題である。この命題は、認識の対象からというよりもむしろわれわれの悟性の限界から抽象されている」(XVII 350 f.)。カントはここで、生起するものはすべて決定根拠をもつという命題、すなわち充足理由律が、無限な系列を要求することを認め、これを「我々のあらゆる理性判断の形式の原理 (das Principium der Form aller unserer Vernunfturteile)」と呼んでいる。この原理の含意は、「現実の結合」の領域、可能的経験の領域では、生起するものが必ずなにもものかの結果であり、その限り例外なく先行する原因をもつこと、である。いかなる原因ももたない出来事、それ自身が端的な第一の始源であるような出来事を経験のうちに見いだすことは、もちろん出来ないが、それは可能的経験を構成する原理そのものが、そのような第一の始源を認めないことに相即している。この「無限な系列を必然化する」現実の結合原理は、後年、純粹悟性の総合的原則で第二の経験的類推として提示される命題「すべての変化は、原因と結果との結合の法則に従って起こる」(KrV B 232)に対応している。この原理は、可能的経験の生成の条件であり、それが事象生起に関して、現実の結合原理として、「無限な系列を必然化する」。

これに対しても一方の命題は、ヴォルフやバウムガルテンが、世界概念の説明に用いた命題に対応しており、アンチノミー論の定立命題を想起させる。この命題は、「認識の対象 (Objekt der Erkenntnis)」すなわち現象する世界から取り出された命題ではなく、また「現実の結合

（Realverknüpfung）」すなわち現象を産み出す認識能力に基づくものでもない。そうではなくて、このような認識能力の有限性、「悟性の諸限界（Grenzen unseres Verstandes）」の認識を前提し、この限界を越える何ものかを想定することに基づく。「悟性の諸限界」という表現は、後年、純粹悟性概念をも越えるなにかとして構成される理性概念（vgl. KrV B 376 f. / A 320 f.）を想起させる。この断片を書いた時点でカントはすでに、世界概念の胎む矛盾が、対象としての世界のうちにあるのではないこと、そしてこの矛盾がわれわれの理性判断の形式そして悟性の限界のうちにその起源をもつという認識に到っていたと思われる。換言すれば、ここでの矛盾論は、互いに矛盾し合う二つの命題であるに止まらず、われわれの認識能力自身の周辺に由来する矛盾、という含意をもつ。しかも、ここでのカントは、そのどちらの命題にも与していない。ここに二律背反論の萌芽をみることは難しくない。この断片はバウムガルテンの『形而上学』への書き込みであり、従ってこのような矛盾についての新たな認識がこの教科書を媒介として生み出されたことが憶測できる。アディッケスによれば、この断片は1769年すなわち「大いなる光」（Ref. 5037）の年に書かれている。「生起するものはすべて決定根拠をもつ」という命題、すなわち充足理由律が無限な系列を強要するとカントがこの時点で認めていることを、ここに確認しておきたい。充足理由律と第三アンチノミーの提示する矛盾の問題とが、カントの思惟のうちで深く結びついていることが、ここからも憶測できる。ライプニッツ以降哲学史が常に繰り返し主題化してきた充足理由の原理は、カントに至ってそれ自らが胎む矛盾の芽を、理性法則自身の矛盾というフォルムのもとに顕にされることになった訳だ。この原理が、第三アンチノミーの両テーゼの根底には確かに横たわっている。

また、同書の自家用本のちょうど先にみた「世界についての否定的概念」の箇所に書き込まれた断片として、次のような文章が残されている。「われわれがここで証明するのは、ただ、知性的な系列（intellectuale Reihe）が第一項（ein erstes）をもつということだけだ（系列の原因は系列の内部にはない。従ってそれは第一項ではない。だから、系列は第一項なしにあり得るし、同時にそれ自身もはや系列の内部にはないような原因をもち得る）」（Ref. 5361, XVIII 161 [1776-78 / 1770-72]）。諸々の出来事の系列、すなわち諸現象の系列は、第一項をもたず、その原因を系列の外部に——たとえば世界に外在する存在（ens extramundanum）のようなものとして——もち得るとするのが、ここでのテーゼである。また、系列の外部にある原因と「自由」については、以下のように述べられている。「理性が原因であるところには、第一項がある。自由と最高存在（oberstes Wesen）。ただ結合（Verknüpfung）だけが認識されるところでは、総合（synthesis）は無限（unendlich）である」（Ref. 5362, XVIII 162 [1771]）。ただ結合だけが認識されるところ、つまり現象界では、結果と原因そして原因とより先なる原因との総合は、決して第一項をもたない。これに対して、理性すなわち観知的な何ものかが原因であるならば、総合は無限であることを止め、自由または最高存在という観知的な第一原因とともにその総合を終えると、ここでは考えられている。

1770年代後半の筆記になるとされる『ペーリッツ形而上学』の宇宙論、就中「無限の前進と背進について」と題された章でもまた、さきのバウムガルテンの宇宙論への註釈がみられ、悟性が第一原因を要請すること、そして世界が自身の外部に原因をもつことが述べられている。「諸々の結果（causata）が第一原因（causa prima）をもつことを悟性は主張する。このように、世界は原因をもっているのであるが、しかしこの原因は系列つまり世界には属さない。この原因に従属

する系列が有限であろうと無限であろうと、それはどちらでも同じことであるが、しかしともかく結果の系列は第一原因をもつのである」（MP 87）。ここに語られる第一原因は、系列に属さない原因、世界に属さない原因すなわち世界に外在する存在（ens extramundanum）を意味し、また観知的という付加語のついた端的な第一原因の理念を意味する。

同じ講義録にはしかし、この問題に対する一方的な解答への批判もみられ、1781年の第三アンチノミーでの所論が、言葉を変えてすではっきりと語られている。「第一原因がなければ、二次的原因（causa subalterna）の系列は理性にとっては、結果を導き出すために十分に規定されたとはいえない。従って理性はそれを把握できない。換言すれば、ものの現存在がただ二次的であるような原因のうちのみ根拠づけられている限り、そのものがどのようにして可能であるのかを、理性は完全には理解することが出来ない。——しかしながら、第一原因の想定なしには無限背進を洞察（einsehen）できないにしても、これが絶対（apodiktisch）に不可能であるとはいえない」（MP 85）。ある事象が何故起こるのかを、充分説得的に説明するためには、その事象がその起源から、第一の原因または最終的な根拠から説明されなくてはならないことが、引用された文章の前半で述べられている。すべては第一根拠をもつ、というテーゼがその根底にある。引用文の後半では反対に、第一原因の想定を必然的と見做す立場への反論が示され、無限背進の可能性が肯定される。この反論が積極的でない理由は、授業での教科書自身のテーゼが無限背進に対して否定の立場をとることと無関係ではないだろう。

5. カントにおける無限背進の問題

【純粹理性批判】の第三アンチノミーで主題化されているのは、無限背進と矛盾を起こす端的な第一原因、すなわちそれとともに背進が完結するような特殊な原因としての自由概念に他ならない。この自由概念はまた、先にみたランゲとヴォルフの論争に際して、世界の第一原因である神の自由としてその是非が論じられた概念である。ここで最後に、カントが無限背進論に、同時にまた自由をめぐる二律背反の問題にどのように答えるのかを見ておきたい。

同書の「力学的—超越論的理念の解決へのまえおき」の節で、空間と時間の系列の無限性（第一アンチノミー）、物質の分割の系列の無限性（第二アンチノミー）を主題化する数学的アンチノミーについては、総合される各項が同種（gleichartig）であり、結果から第一原因へと向かう系列の無限性（第三アンチノミー）、偶然的存在者から必然的存在者へと向かう系列の無限性（第四アンチノミー）を主題化する力学的アンチノミーについては、総合される各項が必ずしも同種ではないとして、両者の区別が繰り返し強調されたうえで、力学的総合の系列が、異種な制約（eine ungleichartige Bedingung）を、系列の外部に認める旨が述べられている。「感性的制約の力学的系列は、系列の一部ではなく、まったく観知的なものとして、系列の外部に、異種な制約を許す。そしてこのことで理性に満足が与えられ、無制約者が現象に先立っておかれる」（B 558 f./A 530）。このように、異種な制約である無制約者を、系列—現象の外部に許容するために、様々な条件が前提されることは、言うまでもない。そして、そのような諸々の前提条件の総体が超越論的観念論を構成しているわけである。そこで核となる思想のひとつとして、純粹悟性の総

合的原則が、またさきに見た第三アナロジーの原型である充足理由律が、ただ時間性のうちのみ無制限に妥当し、時間性のうちに現われない事象には妥当しないことがあげられる。時間性のうち、すなわち「世界内」に現われない事象が、必ずしも自己矛盾を含むような非合理的なものとは限らないと考えるわけである。もちろん端的な第一原因は、時間性のうちには生起しない。従って充足理由律の制約を受けない。つまり、それ自身はより先なる原因をもつ必要がない。この原因は、系列の外部に、世界の外部に想定される。第三アンチノミーに示された自由概念は、非時間的な原因性である。このように世界——現象する世界——の「内」と「外」を分けることで、無限背進を前者のうちには認め、後者を想定することで無限背進を否定するのがカントのこの問題についての基本的な解決のシェーマであった。出来事の制約の系列を原因の側に向けて遡源するとき、この系列が第一原因を許容するかどうかを問う際に躰になる矛盾、すなわち充足理由の原理に基づき世界の全体を再構成する際に生ずる矛盾を、バウムガルテンやマイアーが恐らくは最後まで理性の対象としての世界の側にみていたのに対し、批判期のカントは、世界を対象化し、解釈する理性の思考法則自身のうちこの矛盾をみたのである。カントによればこの矛盾は「純粋理性の法則の矛盾（Widerstreit der Gesetze ... der reinen Vernunft）」（B 434 / A 407）である。しかしこのような理性の法則自身の矛盾が見いだされる課程では、このような矛盾を対象世界そのもののうちに省察する視点があっただろうし、また同時代の様々な研究が外的なファクターとしてカントの思考に影響を与えていたはずである。

この宇宙論的問題史との遭遇のファクターのひとつは、バウムガルテンの『形而上学』の宇宙論にみられる「無限背進」についてのテーゼであった。そこに描写された矛盾論のうちに、第三アンチノミーのひとつの起源をみることもできるだろう。事実、カントが批判期以前から批判期に至るまで、このバウムガルテンの提示した無限背進のもつ矛盾の問題について、繰り返し何度も吟味し熟考していたことは、さきにもたように確実である。自由の問題の「心理学」から「宇宙論」すなわちアンチノミー論への移行は、遅くとも60年代以降端的な第一原因として自由を理解していたカントが、このバウムガルテンの無限背進論に習熟していく過程で成立したと思われる。70年代の後半、講義では教科書の叙述に従い心理学の章で「自由」を取り上げつつ、『純粋理性批判』の草稿執筆の過程ではこのような問題のコンテキストの移行が行なわれていたわけだ。そして、この移行の決定的なファクターとなったバウムガルテンの宇宙論は、18世紀ドイツ思想界に決定的な刻印を与えたヴォルフとランゲの論争にその由来をもつのであるから、上記のこの論争が、バウムガルテンを介して、カントの自由のアンチノミーの構成にまで影響を与えているわけである。

註

- 1) 『純粋理性批判』からの引用には、慣例にならい、1781年の第一版には(A)そして1787年の第二版には(B)をページ付けの前に付す。また、カントのレフレクションからの引用は、アカデミー版全集（Berlin 1900f）により、(Ref.)という略号をそれぞれの番号の前に付す。これに続くローマ数字がその巻数を、アラビア数字がページ数を示す。
- 2) Christian Wolff, *Vernünfftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen* [...], Halle ¹¹1751 (¹1720) (Neudruck Hildesheim 1983).

- 3) Vgl. Wolff, *ibid.* § 518 ff; Johann Christoph Gottsched, *Erste Gründe der Weltweisheit* [...], 2 Bde., Leipzig 1762 (¹1733 / 34) (Neudruck Hildesheim 1983), § 996.
- 4) Vgl. Alois Riehl, *Der philosophischen Kritizismus. Bd. I, Geschichte des philosophischen Kritizismus*, Leipzig 1924 (¹1876), S. 10. 『純粹理性批判』弁証論の第一章「純粹理性の誤謬推理」、第三章「純粹理性の理想」が、それぞれ特殊形而上学の「合理的心理学」、「自然神学」に対応する。
- 5) Karl Heinrich Ludwig Pölitz (Hrsg.), *Immanuel Kant's Vorlesungen über die Metaphysik*, Erfurt 1821 (Neudruck Darmstadt 1988).
- 6) Christian August Crusius, *Entwurf der notwendigen Vernunft-Wahrheiten* [...] Leipzig 1745 (Neudruck Hildesheim 1964), § 83.
- 7) Johann Nicolaus Tetens, *Philosophische Versuche über die menschliche Natur und ihre Entwicklung*, 2 Bde., Leipzig 1777 (Neudruck Hildesheim 1979), Bd. II, S. 49.
- 8) Max Wundt, *Die deutsche Schulphilosophie im Zeitalter der Aufklärung*, Tübingen 1945.
- 9) Bruno Bianco, Freiheit gegen Fatalismus. Joachim Langes Kritik an Wolff. — In: Norbert Hinske (Hrsg.), *Zentren der Aufklärung I, Halle. Aufklärung und Pietismus*, Heidelberg 1989, S. 111-155.
- 10) Vgl. Reinhard Finster, Spontaneität, Freiheit und unbedingte Kausalität bei Leibniz, Crusius und Kant. — In: *Studia Leibnitiana XIV* (1982), S. 266-277.
- 11) Christian Wolff, *Rede über die praktische Philosophie der Chinesen*, übersetzt, eingeleitet u. hrsg. von Michael Albrecht, Hamburg 1985.
- 12) Vgl. Bianco, a. a. O., S. 111 ff.
- 13) Vgl. Johann Christoph Gottsched, *Historische Lobsschrift des weiland hoch- und wohlgebohrnen Herrn Christians, des H. R. R. Freyherrn von Wolff*, Halle 1755.
- 14) Vgl. Carl Günther Ludovici, *Ausführlicher Entwurf einer vollständigen Historie der Wolfischen Philosophie*. 3 Bde., Leipzig 1737-1738 (Neudruck Hildesheim 1977).
- 15) Johann Heinrich Zedler, *Grosses vollständiges Universal-Lexicon*, Bd. 58, Halle u. Leipzig 1748, S. 883-1232.
- 16) 先に触れたゴットシェートの教科書以外に、例えば、フロベセンの『ヴォルフ哲学の体系』（1734）、ロイシュの『形而上学体系』（1735）、バウマイスターの『哲学定義集』（1735）、ヴィンクラーの『ヴォルフ哲学提要』（1435）等が、この間に出版されている。詳しくは上記ツェードラーの百科事典「ヴォルフ哲学」の項を参照されたい。
- 17) Vgl. Bianco, a. a. O., S. 111 ff.
- 18) *Des Herrn Doct. und Prof. Joachim Langens oder: Der Theologischen Facultaet zu Halle Anmerckungen über des Herrn Hoff-Raths und Professor Christian Wolffens Metapysicam* [...], Cassel 1724 (Neudruck Hildesheim 1980).
- 19) Vgl. Wolff, a. a. O., § 143.
- 20) Benedictus de Spinoza, *Ethica*, Hrsg. von Konrad Blumenstock, Darmstadt 1967, S. 130 f.
- 21) Spinoza, *Ethica*, S. 130.
- 22) “Deum non operari ex libertate voluntatis” (*Ethica*, I Prop. 32, S. 134).
- 23) Vgl. Spinoza, *Ethica*, I Prop. 28, S. 128.
- 24) Vgl. Gottsched, *Erste Gründe*, I § 337.
- 25) Alexander Gottlieb Baumgarten, *Metaphysica*, Halle ⁴1757 (¹1739).
- 26) “Fatum est necessitas eventuum in mundo. Fatum ex necessitate mundi absoluta esset spinositicum, non ens, [...] nec in hoc, nec in ullo mundo ponendum” (M § 382).
- 27) Vgl. Gottfried Wilhelm Leibniz, *Monadologie*, § 53, in: Carl Immanuel Gerhardt (Hrsg.), G. W. Leibniz, *Die Philosophischen Schriften*, 7 Bde., Berlin 1875-1890, Bd. 6, S. 615 f.
- 28) Vgl. Gottsched, *Erste Gründe*, I § 331 (Kosmologie) u. § 1147 (Theologie).

- 29) Georg Friedrich Meier, *Cosmologie*, Halle 1756.
- 30) この点については、次の拙論を参照されたい。「無制約な決意性としての超越論的自由」（カント研究会編『現代カント研究3 実践哲学とその射程』, 見洋書房, 1992年）。

文献略記表

Cos : G. F. Meier, *Cosmologie*.

DM : Chr. Wolff, *Vernünfftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele [...]*.

Kontrov : Des Herrn Doct. und Prof. Joachim Langens oder [...].

KrV : I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*.

M : A. G. Baumgarten, *Metaphysica*.

MP : K. H. L. Pölitz (Hrsg.), *I. Kant's Vorlesungen über die Metaphysik*.